The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	GLOCOLブックレット17　はじめに
Author(s)	宮原, 曉
Citation	GLOCOLブックレット. 2015, 17, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55600
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに
他者の現場を読む

宮原　暁
大阪大学グローバルコラボレーションセンター教授

「現場」という語は、英語に訳しにくい何かしらニュアンスを持ったコトバである。医師、看護師、臨床心理士、社会福祉士等の対人援助専門職や、社会学、文化人類学、生涯発達心理学、臨床心理学等の研究者は、医療現場、心理臨床の現場、日常的実践の現場ならびに、研究の現場に立ち、人々の経験を理解したり、共感したり、あるいはエスノグラフィックな記述が可能になると信じてきた。「現場」では、人が生を通して経験するアクチュアリティを直接観察することができると、本ブックレットでは、「いたみ」、「かなしみ」、「他者」をキーワードに、こうした「現場」に立つことに観られる他者理解の構造の現在を医療社会学（Winston Tseng）、文化人類学（島薗洋介）、地域保健学（安梅勅江）、生涯発達心理学（やまだようこ）、人の移動（宮原暁）の5つの異なる視点から問うものである。

この5つの報告には、二つの読みどころがある。一つは、「寄り添う」ということについてである。「寄り添う」というコトバは、近年、様々な場面で多用されるコトバのひとつであるが、人類学におけるフィールドワークにせよ、国際協力や災害復興、医療、介護にしても、物理的な「現場」の共有というだけで「理解したような気になる」あるいは「共感」を強要するという点は、批判的に検討されなければならない。

医者と患者、インフォーマントと調査者、理解する側のマジョリティと理解される側のマイノリティ、自己と他者の間には、越え難い心理的距離感がある一方で、フィールドワークは、現場に立つことでその心理的距離感を理屈のうえで克服しようとしてきた。

当初、主観に対する客観的理解を出発点にしたこの企ては、アクチュアリティに「寄り添うこと」や「接近すること」、あるいは

それを「共感すること」がある種強要される状況を生み出している。本ブックレットでは、それとは別の「寄り添い方」を模索し、あるいはsubjectivityのあり方そのものを改めて問い直す契機を提供する。

ふたつ目の点は、「他者」の重層性についてである。自己と他者の関係は、医療従事者と患者、フィールドワーカーとインフォーマントという二者関係だけではなく、より重層的である。

たとえば患者さんが、病気とともに生きる自己を他者化するといったことや、代理母の話で言えば、産みの母にとっての他者としての代理懐胎した子ども、育ての母にとっての他者としての子どもなどは、重層的な他者のあらわれである。

本ブックレットの報告は、「現場」において錯綜する「他者」の存在が、かえって自他の境界を流動化させ、その流動化がもしかすると共感の糸口となる可能性を示唆している。

こうした意味で、「現場」に立つこととは、「他者」を感じたり、直面したりする「他者」を発見することだとも言い換えられよう。

時代はどちらかというと「自己」の時代である。越境は、「自己」と「他者」の出会いとしてではなく、「自己」が際限なく拡張するという意味においてのみ起こっている。多様性は、「他者」の尊重ではなく、「自己」の尊重の言い換えとなる。「他者」の学としての人類学よりも、「自己」の学としての心理学の方に、人は人間理解への近道を求める。当の人類学ですらも、「自文化」を研究することが増えている。

そうしたなか、フィールドワークがもつある種の特権を相対化し、「他者」に直面する「他者」を発見することで、これまでとは異なるsubjectivityの理解に立った、新たなフィールドワークの可能性が見えてこよう。